

芭蕉翁羽装句集  
上





發句

春

何れも春の家も来たり今物のま  
 庭川の雉集語の文庫より今物のま  
 えりやおれ人の世に秋のま  
 えりよ田舎のまに白くをまに  
 筑前霜のまをまの松かま  
 ままや新のまもまのま  
 誰れも春のまをまのま  
 山嵐雪うもまのま  
 誰れも春のまをまのま

發句

〇一



言はく一をば名我きもんと海のにおまよて元日並まて  
海く海く心さつ一ぬ

二日あもぬうらむせしれ花はともふ  
季吟勃をま歌

秋夜亭 秋夜のつらむやハをばハをば  
却ちうよふ心さつ一をとりて

薄をたて誰人の心は 花はま  
御次 空名座のまをまひしをたてはまをまをまを  
大徳経の年はま一何 佛  
高ぶやのゆくとをまはまのまをまをまをまをまを

敵もあて賑ふをみや 庭 電  
とくくや様よきせたる 様 の 面  
人もえぬ まや 鏡はくくのま  
茶葉よ 空をまや伊勢は初たたる  
子日しは都くゆつて 友もつれ  
古留や 昔はくゆく 男とも  
四方よりは昔もまをまをまを  
よくはれま昔もまをまを 垣根くれ  
葉葉まをまをまをまを 葉くれ  
一とせよ一庭つはくから葉が  
山宿子并は飯葉まを海川まを持葉まを



我まきりぬ鶴哺のまは芽は後  
 常や奔はうしは 藪のま  
 葉もや好ま糞すも 椽は先  
 おはうりや牛も初事と啼つて  
 古の好まやかまはの二まあ  
 出来はのほりあて

ぬまふたを、梅さへ葉はの垣根式  
 伊賀は成りてにて

猿うしはま葉うたふたうにあり  
 秋風うたはれは山家まよふ二白

梅句——たのつや鶴をぬすまへ

梅のまは花よのちをぬすてて  
 梅咲やあらくはるの 京太良  
 あまうそをいふをあはれ 梅は花  
 おあはれ 常は感のつたのまや  
 山家 ち鼻のむきまへ 梅はさうま  
 伊賀のまはあまのまのつたをぬす  
 薪とてはまをいふてはまはる  
 ち人何某もあまのまをぬすはれ  
 つたは葉の藪の中なる 梅はま  
 伊賀は神地の内なる梅もあまのまをぬすはれ



一本のうらみ

細代に部は息のちひして  
梅はるれ

園女がきて  
梅のまゝ粒やうら木や梅はるれ  
暖簾はあぐりのゆうー水はるれ  
ふてゝに万葉おきー梅はるれ

卓袋亭  
月結  
月結や梅さけゆへ小山もー  
里は子の梅さうのあせうーは靴  
まもやけしたるは月と梅

去来のもくかた人たるかきつるは  
梅はるれ

草薙はさしみるすー梅はるれ

梅さるるの月と梅はるれ

何系新ハききまは二月十日は梅はるれ  
母と父梅丸はるる中きは

梅さるるむーは一字はるれなを  
うんててさるる梅はるれ

紅葉あや見ぬ急作る 玉すたれ

乙あう江戸へおもむいた

梅さるるれはるる梅はるれ  
うり柳 さるる流るれ女う那  
かそくはるる梅柳  
梅はるれ梅はるれ







陽炎けりとの扇より川 成るるに  
かけりや柴かたけりとの扇より  
いよよと結ひつ事たるけりやれ  
於かき梨か接しやや一き

張所  
の全 糞の糸とて其よ 漱田はおく

袖よりすん田標の海士のひきをたき  
藤よすたぐ白魚もをを清ぬき

苗別  
曙や白魚とるきりり 一す  
瓢の子は白魚おるり 別りれ

現子圓談  
白魚や思き月まけりけの相  
白うまきりりいあけりりみるれ

老慵  
蛸うりも海苔を食老は 老老とせき

子埋  
油苔けりり後んせけり 油苔 挽  
おるけりや歯よ食あてり 油苔は海

二月堂にありり  
ふりりやありりけの雷のやと

是橋  
利發して医つていをせり  
初年の物の別り 顔りれ

何事  
神垣やおりひりりけり 神懸像  
神居らまおりり西の相をまひ増をけりを此

しむ二白  
裸よはさるるたきりりたけりれ



北情子後贊

何の本の程もあつた自もく乳  
 橋やいせは 白子の店りし  
 唐土の傳備もむるあてう  
 膝たこもりり野中におも歌え  
 起ふく ころもせんぬるの蝶  
 蝶は羽の幾度あゆみ屏おや糸  
 古法や舞といふも 水の草と  
 なつた身も <sup>そい</sup> 誇りたぬや春うれ  
 原中におあつた人味も春者  
 お花もるころもすらぬ 時りぬ  
 父母は頼りあひし 雛子たゝる  
 多野中

名木亭

後情

多野中

いも峰中おれ松子や雛子たゝる  
 蛇くもりも思ふたれは  
 姨ふも峰かきし たつきんぬ  
 松の涙もおろそきし 無  
 煤ほりて埃もくもる 無  
 春子とて春啼くも人 無  
 善まきき 口ッ谷さけり 紙草履  
 麦飯もや法もくもる 猫おる  
 猫の急やせりた 園おれ  
 湖水眺望 幸崎おれ 花もる 無  
 春あつたて 故人もる



二役よりこれを見ゆる麻の角  
堂の柱もさうたる桂のうめ  
庭の梅もさうなるけいり花桂  
持ちの費は柱のむし一柱を梅のま  
たけいもさうなる

山崎のきんぎょさうやうさうさうみれ仲  
呂丸のきんぎょさうさうさう

菩提山 山崎のきんぎょさうさうさうみれ仲  
二乗軒 殿つらさう門さうさうさうさうさう  
龍尚舎より有職のくさうさう

茅舎の  
画賛

おけなまま川 川の萩のわづらさ  
花さくさうさうさうさうさうさう  
木曾の情さうさうさうさうさう  
春柳の涙さうさうさうさうさう  
住方の人さうさうさうさうさう

さうさう西岸寺は住にさうさうさう  
我々さうさうさうさうさうさう

尚白がさうさうさうさう  
只一抱枕さうさうさうさう

草菴の枕揺らさうさうさうさう  
本情さうさう







万手別冊

本はゆふけも難くさうらの  
まなくや標きふれ花は蒼  
まのむハ標よゆてあまひけ  
古もや花は緑出のいろむき  
まの涙の先きおゆーふさく  
うやまー夏世のおれさく  
河園院も花よなまけと馬と緑

愛方知酒聖貪始買錢神

花よりきぬさう海白く飯思  
世よまろろ花あもく佛中け  
榮畑こ花久うゆるる蒼う形

吟行

親喜は薨れんやう川 花  
花咲て七の鶴身は禁  
花よ持入蛇たうしそ友雀

草菴

羽五の松の本さうや谷の老木はさうさうまゆたの  
まろろろくぬらひらまろろまろろまろろ一掃のたのみ  
の糸は聖いしくとまろろして後賢者のそろろ  
淋ーま花けらうの聖たうぬ  
まあ清も花見はせまろ七と漸  
孰竹菴は緑まろろ緑のけりいれまろろはれ



花を宿とすし水鏡や其の如と  
 けしむを花に禮し引りぬ  
 花は陰 破ふかきる 丸かきり  
 酒のよまかきり人かきり 花は糸  
 花門はく人かきり 出産せん  
 ういぬ 花きりり 山きりり 花は朝りり け  
 志りりりり 花はく人かきり 月おひ  
 子屋琳し 花は陰 花はく 旅 花は  
 かつきりり 花はく 花はく 花はく 花はく  
 う 花はく 花はく 花はく 花はく 花はく  
 花はく 花はく 花はく 花はく 花はく

花のうた 花のうた 花のうた  
 二月のうた 花のうた

路草亭 花のうた 花のうた  
 花のうた 花のうた

花のうた 花のうた 花のうた  
 花のうた 花のうた 花のうた  
 花のうた 花のうた 花のうた  
 花のうた 花のうた 花のうた







音小くたのまきほくたるかたは松崎またのみて  
 口つ又雲の林もぬたえむりれ  
 又考東野別 けあうろ推せよつたふ又第一具  
二部の無 花より碎る羽織着てかゝり撞ひ女  
 志はしむれば尾もすくぬまは妙的  
 端端も物よろき世は 茶にとり  
 論通ふみまはくに越くとた  
 草花はあつとれた息しとてあま

そはやくとひととて旅者よ腰をうけて  
 躑躅してそははなす干籠さく女

画賛

丹波市とらやのあまて日おきかるとけま

花外て宿るあうりやあちねらる  
 山吹のあま葉はあはれあちねらる  
 西河あま ちんくも山吹あやあはれあま  
 山吹やあまきさくき枝の飛  
 山吹や宇路の焙炉の自さま  
 肉裏離人飛天宮は清幸とらや  
 物は名の増やあちねらる鳥  
 芭蕉植てせんちむ萩の二葉  
 ちんくもあまはあちねらる

画賛







夏

舟月は未座より言とて船のほのほををり

夏夜は清く風をとりほくきん

一ツ程でほくおひぬ衣かく

ほくきん正月を梅は花さつと

清く言ん耳より音短て 勢に

ほくきんちやく飛そつうかた

きすあつといふ魚を細くして生かすはくはく

けくを鳥の飛ちうてはくみきくをみみて居る

りておとくを海にけくももるにや古戦場の志

跡をとりてかゝる事をはくやといふ飛ちうたふ  
むくはくきん

ほくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

ほくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

俄より時中ひはくを高角よりよきやうて

ほくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

数代よりくるはくはくはくはくはくはくはくはく

さくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

節をはくはくはくはくはくはくはくはくはく

不ト一周忌琴風勅を

子規啼もやあまふ 硯 糸







舟一為やうき柳一ね及まゝ一  
知足亭を居あやて

かたきをいふはむねのむねのむね  
天坂みてあ人のものもあて

山家宗鑑かゝるは近侍よの宗鑑すまゝを  
かたきをいふはむねのむねのむね

あつゝいふはあ人の  
あつゝいふはあ人の

あつゝいふはあ人の  
あつゝいふはあ人の

あつゝいふはあ人の  
あつゝいふはあ人の

髪は白く山見らるやけ一は花

あつゝいふはあ人の

伊豆は金輪も小娘はあつゝいふはあ人の

あつゝいふはあ人の

あつゝいふはあ人の

あつゝいふはあ人の

甲斐の國はあつゝいふはあ人の

あつゝいふはあ人の

あつゝいふはあ人の

あつゝいふはあ人の

武府はあつゝいふはあ人の



餘別れをいひておれり

麦の種をたうりつゝおの割々お  
二度相葉子うもとにありて今もあへりえとすに  
ほへん葉多りておの種は名残るれ  
贈地條新を自画自賛

きうくおあや 牡丹は花 の名  
振撰寺少て鑑真和尚は佛影をぬしは月は首をせ  
たきうし事とせおのいほけく

まゝい  
高城寺へ湯目おききぬくとげや  
は磨の浦一見のこゝ

すはてゝた 難ぬ弟きく 木下雲

雲岸寺におくは佛頂和尚は山居の流り

木塚も唐寺やあけり 又木立  
石山のおく園をうよふ人けは任捨たる菴あり住  
唐より法法はぬは住境いともたてしをにせん  
ゆはちお月おきあたるゆいそ

又たのおむ推の木もあり 又木立  
又山や杖にふひは 一里のゆ  
お向はる唐寺うよふおのて 涼し  
清浄や流る 又也 喜お松葉  
法殿やあぬよせくふ 左  
山く川のおくおひとほるおのて

甲斐  
山中

巻四

一八











此書痛筆一はもは次のみ月あふるの事ありて  
はくはぬれも余泥かきし海ありて

此書清きいりまみ月れぬる

光堂七寢らるる珠の鹿風やあれ金  
は軽重書に枯るる

又月あは降のまじや 光堂

又月あはあつて早一室之川

日好道や葉かこもく 又月あ

そは種<sup>か</sup>み 又月あや色紙へきた子雲はれ

又月あや天去らるる 素はるる

素はるるや付家

又月あは降はるる葉はるる

大井河のまじや降由場半氏らもよもよも

まみわたしの雪吹おろせ 大井河

又月あはるるまおりの物あは

月にあはるるときはれさるる又月あは

入柄をのの私あやさ法き

駿河の語やそれ橋も葉は白ひ

眉掃を付にして知のまは

はくはくは板はるるの種り

少人みまを標やあは 花里

素門己白亭になく終りて







己う火を赤くけ雲や花けやと  
春をなむ首飾りつき 雲のく  
裏あ白河あて

冥宇にけ宿をさる難よ 甲乙おを  
ちけ心亭 大け宿らる難も去るぬ 籠るぬ  
雲あうもわらぬもく道おうーてもよに白  
氏う家よわらぬぬ

あ難たうと人のしんをけや海  
鶴何とくもの足付んと暮想も しのむひ中  
さけしに

まゝたうし長良の川の 結 鶴

鶴子けぬらるるゆるよぬとて

おりらうてわうてぬーき 鶴子け  
あをうくけりあうたま 早あふ  
清水流る、お橋をせ舞念おいたうて田け畔に  
のあうはくのほらあやと舞ひいーまけけは柳の陰よ  
たてこまうとゆるはま

田 一 投 抄 下 三 五 八 折 一 水  
裏あ今け白河あうらうて二白

子ああも 戒をさあき 日 殺うぬ  
西うああをす川 早ああも 風の音  
等ああとうらもの白川の雲うあけはらやとあま



風流のきしめや田うゑに  
あけの空もちやうはるをきて

子花もさるゑやむし  
はまけしるはもさるや 田植の

尾張をく舊交よあは

世を流る代り小田はれり

羽馬山にあたりて後鶴をよのりて

りつしや山ま出相お初前子

海田場本氏より

菅をばらまきかたうやおる汗

竹ノ疎日

陸のきし竹植るむらさきと

あなをの

情のちやうはるを夏の日

月をきておたるるるや

多を打ち本環よあはる

友の月影けりて赤坂を

幸津や友の日は出の

友はおやあまのひ

指のさかしたるは

指のさかしたるは

深さやあまのひ

無常迅速 やうてあはれ

くはむをのひ







すしはらふる家もんゆる 住居るれ  
南も併 茶は事すししは  
きつてなま松を枝をさるく

涼しきすくは雪の枝の形  
すしきさきほろりけり 暖蔵の行  
風の多し南もさし 雲と川  
くたさる世もいひたてさるりや松風  
茶菴よすくみく

羽黒山 雪は河豚丸揚る年月は  
あつたや 雲もかきしり 南 谷  
火山は像も湯人

風かきり 明藏も襟もつく路を人  
き波や風はうきまは相松子  
小倉山方寂ちり

松枝をほりてや風はうきまは  
雲は雲いり川 雲も月は山  
湖や 異もを在 雲は緑  
奉回まのう家は名を梅して二句

しりしりしりしりしりしりしりしりしり  
甚れ家は月をまはるや 雨はまれ  
夕顔は白くねの枝葉は紙燭とて  
くろくや 群て 雲も人 雲は完



夕暮の干瓢むいへ拵ひき理  
星散の早稲まむむ 表かうり  
被子花はみしりお移りて星散  
子ともしよ星散むぬれむむ  
李中の人又は書信中

星散よ星散めさうりのなめ山  
河原松崎宅にてきた長瓢はれはるをさけて下に  
雲絵の羽織をまきくはれはるをさけて下に  
下りてきたる  
ふりたの祀索いりたるはるをさけて下に  
楳峯山は松のふ原へ

山はけや身をやれはるをさけて下に  
初生は葉四ふやれはるをさけて下に  
花はるをさけて下に  
ふもも胡あもつらけありは花  
胡あもつらけありは花  
柳あはるをさけて下に  
我は似れ二つはるをさけて下に  
ふりた皮むいりてきたるはるをさけて下に

止成像

鐵肝三下此人之情  
拵ひきかゝる洞や拵ひき  
酔て病ん拵ひきかゝる洞や拵ひき



菖花実ハ似遊マせん 花ハつゞ  
さつハ名實足らぬ 清水哉  
形原の相見ハ出ル程ニ野菊ハ  
さたりの二人馬ハ後ヲ追ヒテ  
名実ハつゞけぬ 清水哉

あさひのふらふら花ハつゞけぬ

波卓山

蝶花也古井の清水先ハつゞ

形原ハ清水の計のお趣ハ  
支井ハ一方にぬれきつぬ

湯を流ハれきつぬ  
流を流ハれきつぬ  
流を流ハれきつぬ

晋の例ハをうらむ

窓形ハ一層ハぬれきつぬ  
子子ハ流ハれきつぬ  
なまハ人ハ小神ハ今ハ出用干  
修験堂の事ハつゞけぬ

秋鴨主人ハ佳景ハぬれ

山ハつゞけぬ  
扇風ハつゞけぬ  
松嶋  
流ハれきつぬ  
松ハ流ハれきつぬ



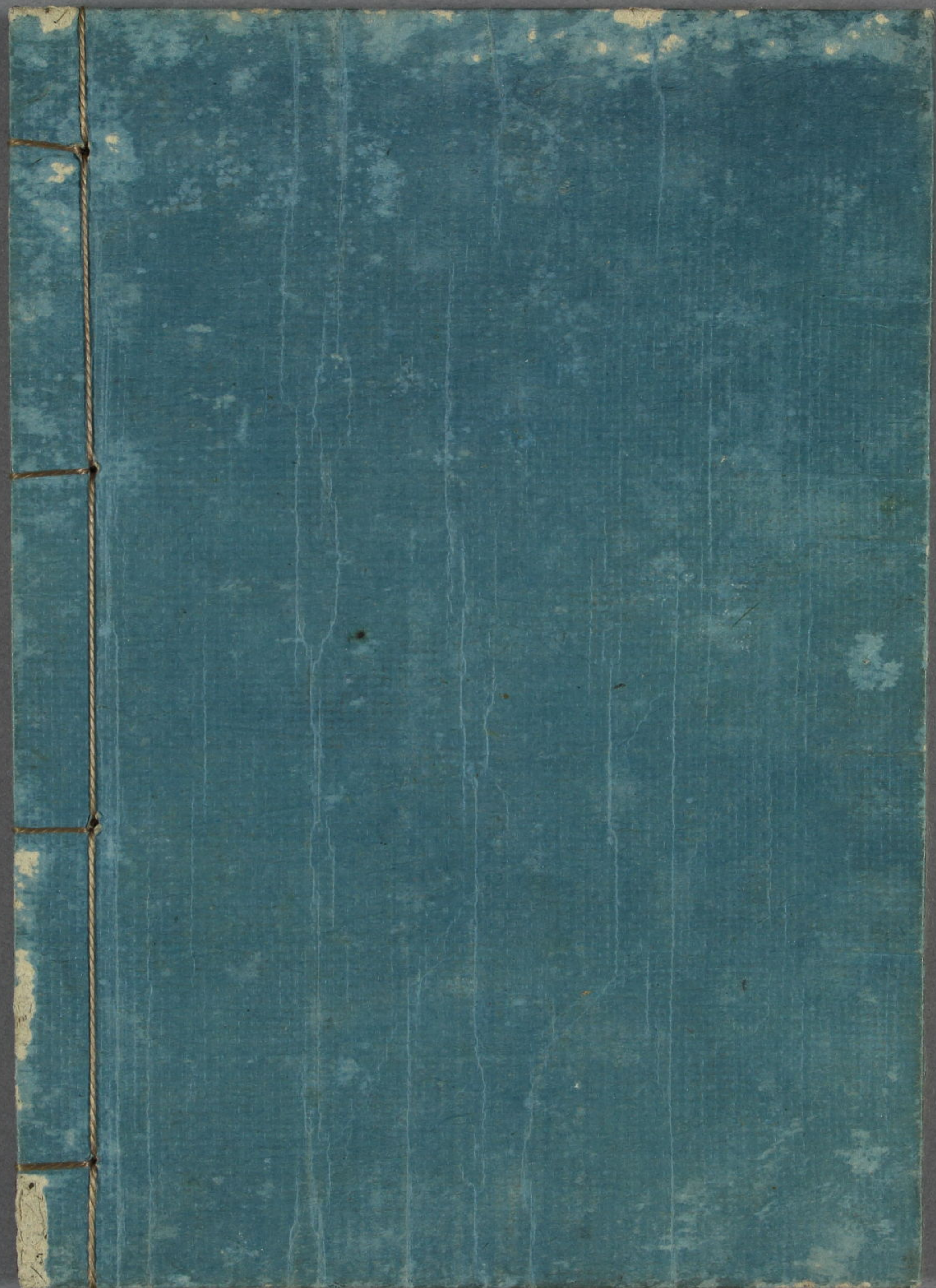
新庄自水亭より

水竹舟に氷室のつねを尋ねて  
暑き日を海に入れたる川  
あま月にもく病やこれ暑き  
蛤は口をひたすわふりさうれ  
之の月や朝かあはれも垣より  
の月や夜もあはれくわくわく  
あはれくはれはいたる道  
の暑  
かたきよく小舟のこゝろは腕の腸  
母はまや海氷よりあはれ  
秋ちかたはあはれや  
あはれ

不卜亡母  
聖母









芭蕉句選再校

芭蕉句選再校

全二冊

蕉門書林

系良堂長子法  
日 為良 板行



